

2002 年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

参加国数：66 カ国

応募総数：2437 作品（子どもの部 1374 作品、若者の部 1063 作品）

文部科学大臣奨励賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 『調和は私の世界』
アナスタシア・ラカヴァ（ベラルーシ）11 歳

<若者の部>

- 『調和』
リアット・マルガリット（イスラエル）18 歳

優秀賞（各 2 点）

<子どもの部>

- 『調和』
マリアム・タゼーム（パキスタン）11 歳
- 『調和とは何でしょうか』
上田 茜（日本<米国在住>）9 歳

<若者の部>

- 『地上のハーモニー：真の最高傑作』
アリソン・ズビックス（米国）18 歳
- 『21 世紀の調和世代』
ダリオ・ダンドレーア（イタリア）18 歳

入選（各 5 点）

<子どもの部>

- 大久保匠馬（東京都）15 歳
- ムナム・アルシャッド（パキスタン）11 歳
- ウルフアス・ニザール（スリランカ）15 歳
- 斎藤 真帆（日本<カナダ在住>）12 歳
- リダ・ファティマ（パキスタン）12 歳

<若者の部>

- 施 佳玉（中国）18 歳
- 和田 訓子（宝塚市）17 歳
- カルアクチ・ゲダラ・ラサンティ・マンジュラ・
バンダラ（ネパール）16 歳
- オーンワイパ・ラグカラ（オーストラリア）22 歳
- イレネ・カブラ・ガカホ（ケニア）24 歳

佳作

<子どもの部>（25 点）

- ファティマ・アフメッド（パキスタン）9 歳
- サマンサ・カーリン（米国）10 歳
- アリオナ・ジェフィモヴァ（リトアニア）10 歳
- スネハ・シャー（米国）11 歳
- ダーシャ・コミサルック（ベラルーシ）12 歳
- マーシャ・コルシュノヴァ（ベラルーシ）12 歳
- 佐野 友紀（日本<ベトナム在住>）12 歳

<若者の部>（21 点）

- 朝田 百合（日本<英国在住>）15 歳
- 方 蕾（中国）15 歳
- タチアナ・デル・カルメン・ゴメス・コロナド
（パナマ）16 歳
- スーザン・マリオン・ロバートソン
（カナダ）16 歳
- ディヴィヤ・ヴェイズ（香港）17 歳

- 浜村 友香（日本＜米国在住＞）12 歳
- ローダ・ジェーン・イラヴェ
（パプアニューギニア）13 歳
- 西 純一（茨城県）13 歳
- コール・ブライアン（米国）13 歳
- 市川 由莉奈（日本＜カナダ在住＞）14 歳
- 王 妹儀（中国）14 歳
- 岡崎 優美子（日本＜イタリア在住＞）14 歳
- 高橋 美穂（日本＜ベネズエラ在住＞）14 歳
- サラ・ラスル・バンガッシュ（パキスタン）14 歳
- エリアス・エセキエル・ロメロ・ファリアス
（チリ）14 歳
- ケート・ポボルツェヴァ（ベラルーシ）14 歳
- アーリーワイン直美
（日本&米国＜米国在住＞）15 歳
- ウマラ・アラム（パキスタン）15 歳
- ヤシス・ウダラ（スリランカ）15 歳
- 大木 まどか（東京都）15 歳
- ザチャリア・カドウドウ・オディアンボ
（ケニア）15 歳
- ザイン・カリッド（パキスタン）15 歳
- アナベル・ソーワー（米国）15 歳
- ジャケリーネ・パウリーナ・エレーラ・カラスコ
（チリ）17 歳
- ナタリー・グヴォズディコヴァ
（ベラルーシ）17 歳
- マッケンジー・ケホー（カナダ）17 歳
- アンドレア・スソリアコヴァ（スロバキア）17 歳
- アントン・アドリアーナ・ダイアナ
（ルーマニア）17 歳
- ケイティー・ファース（カナダ）17 歳
- ラファエル・ベルフォル・リオス・ムニョス
（チリ）17 歳
- 毛 雅敏（中国）17 歳
- サウラブ・シンガナパリ（インド）19 歳
- 食野 さら（東京都）19 歳
- 伊藤 由美子（東京都）21 歳
- 岡田 彩（東京都）21 歳
- 後藤 薫（岐阜県）21 歳
- 安藤 規子（大阪府）22 歳
- 唐鎌 大輔（東京都）22 歳
- イヴゲニア・マライア（ロシア）23 歳

学校特別賞（2 校）

- OPF 女子学校（パキスタン・イスラマバード市）
- 武蔵野東中学校（東京都小金井市）

調和は私の世界

（原文は英語）

アナスタシア・ラカヴァ（11 歳）

ベラルーシ・ジャルジンスク市

ジャルジンスク市立ベラルーシ学校 6 年生

平和と調和は人間にとって一番大切なものです。調和には人との調和、自然や動物達との調和、自分自身との調和など、いろいろあります。

大小の違いはあっても、それぞれの家族は調和して暮らしていかなければなりません。私の家族は大家族ではありませんが、とても調和した家族です。父、母、そして私の 3 人です。私達は皆が一つのものの一部のように感じています。何か問題が起これば、一緒に力を合わせて解決します。父は国際長距離便のドライバーです。仕事で遠くに行っている時は、私はとても淋しくなって、電話代はかかるのですが、父の声を聞きたくてよく電話をかけてしまいます。そうすると安心して平和な気持ちになれるので

す。父が家にいない時は、私達の一部が遠く離れてしまったような気がして、切ない気持ちになります。でも家族全員がそろって家にいる時は、退屈することなど絶対にありません。皆で冗談を言い合ったり、一緒に買い物に出掛けたり、友達や親戚を訪ねたりします。

家では 2 匹のペットを飼っています。マックスという名前の犬とレヴカという名前の猫です。どちらもまだ赤ちゃんです。マックスの方はまだ 3 ヶ月で、レヴカも 2 ヶ月です。どんなに小さくても立派に家族の一員で、彼らのいない生活は想像することも出来ません。

自然との調和、これもとても大切です。自然は私達の母であり、自然と調和して生きることは人間の義務です。私達はあらゆる方法で自然を守り、助けなければなりません。自然のいのちに手を加える時は、先ずよく考えてからしなければなりません。人々は自分の行動が、壊れやすい自然界のつながりを破壊しないかどうか、その影響に常に配慮しなければいけません。自然と調和して生きている人々は、決して自然を傷つけることがありません。いつも自然の美しさを楽しんでいます。

自然は一年中私達を楽しませてくれます。春には、長い冬の眠りから覚め、木々も新しい葉をつけ、庭の花々も一斉に咲き出します。小鳥達は可愛らしい歌声を聞かせてくれます。夏になると、私達は野原や庭一杯に咲き乱れる花々を眺めたり、虫達のせっせと働く様子、ミツバチが蜜を集める様子、チョウが花から花への舞う様子、トンボが日光の下で不思議なダンスを踊る様子を観察して楽しみます。冬には、きらきらと舞う雪や、暗い夜空に美しく輝く星々に魂を奪われます。凍てつく冬の満月



が照らす、魔法のような光の中にうかが、雪に覆われた木々の姿は、この世のものとは思えません。こうした大自然の不思議な変化は、私達の魂を、愛と平和と調和で満たしてくれます。私は自分の人生をこんなにも幸せで楽しいものにしてくれる母なる自然に、とても感謝しています。

でも、自然界の調和が人間によって壊された時の結果は、とても恐ろしいものです。これについては、1986年春に起こったチェルノブイリ原発事故を挙げなければなりません。私はまだ生まれていませんでした、しかし今でも私の故郷では、人々が皆、事故の影響を色濃く残した中を生活しているので、私もそのことをよく知っています。私の故郷は大きな被害にあいました。ベラルーシの国土の23パーセントは核物質で汚染されています。穀物を栽培することも、森でキノコやイチゴを摘んで集めることも出来ません。見えないところに潜んでいる危険性によって、生命の存続自体が出来なくなりました。大勢の人々が家を捨て、新しい生活を始めなければなりません。亡くなったり、身体に障害を持つようになった人も多くいます。

その悲劇は今でも続いています。核汚染は大地や水、空気に深く浸透しました。既に大勢の人々が核汚染で苦しめられてきましたが、何よりもひどいのは、祖父母の世代の無責任によって、私達の子どもや孫達もこれから先、苦しんでいかなければならないことです。私は、自分や自分の子ども達の将来のことを、とても心配しています。

内なる自分と調和して生きることは、他の人や自然と調和して生きることと同じくらい大切なことです。私は次のように理解しています。もしある人が、困難な状況を抜け出すための重要な選択を迫られた時、その人は自分の内なる声に耳を傾け、内なる世界を理解しなければならないと。

もしその人が調和の人であれば、間違いなく正しい選択をするでしょう。私達はもっと自分達の内なる声に従うべきです。そうすれば悲劇的な過ちを起こすことはないのです。なぜならば、私達は自然の一部であり、自然は決して私達を裏切らないからです。しかし、そのためには、常に目や耳、そして心をオープンにしておかなければなりません。

もし世界に調和が達成されたなら、地球は戦争も病気も飢餓も無く、人々は平和で幸せに暮らすことが出来ます。子ども達は幸福な子ども時代を過ごし、親や祖父母達は静かな老後を過ごすことが出来ます。

世界中に調和が満ちあふれますように

これは私の心からの願いです。

2002 年度国際ユース作文コンテスト

【若者の部】 文部科学大臣奨励賞（最優秀賞）

調 和

（原文は英語）

リアット・マルガリット（18 歳）

イスラエル・エルサレム市

ヘブライ大学附属高校

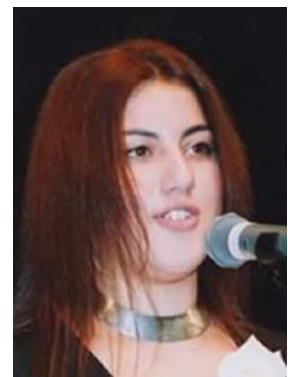
「狼は小羊と共に宿り 豹は子山羊と共に伏す。子牛 若獅子 肥えたる家畜ともに・・・（イザヤ書 11 章 6 節）」

中東の厳しい現実が日々の生活を支配する中で、調和についての作文を書くことは、私にとって大きなチャレンジです。そんな状況が過去 2 年間も続いており、私達は、一つの土地を分かち合う、あるいは分かち合うべき二つの民族、パレスチナ人とイスラエル人の間で毎日続く（人によっては慢性的とも呼ぶ程の）紛争の中で暮らしています。しかし、常にこういう状況の中にあっただけではありません。かつては私達も調和と共生の真の意味を知っていたのです。私は、調和の定義を書き連ねる代わりに、今はほとんど絵空事にしか映らなくても、幾ばくかの希望をもたらしてくれるであろう自分自身の体験について述べたいと思います。

1998 年、私は「シーズ・オブ・ピース（＝平和の種）」という若者達の運動に参加しました。このプログラムでは、（アメリカ）メイン州におけるサマーキャンプにアラブ人とイスラエル人の 10 代の若者達が集いました。

この運動は、中立的な場所で民族同士の共生を可能にすることを目的としており、若者達はお互いのことを知り、かつては「敵」と呼んでいた相手と、同じ人間として向き合えるように活動を行っています。私にとってシーズ・オブ・ピースは、ただのサマーキャンプではなく、自分自身の生き方そのものとなりました。私は二つの民族に属するもっと多くの人々を引き合わせ、相互理解を深められるよう、メンバーとしての活動を続ける決心をしました。それが私自身の旅の始まりでした。お陰で私は、それまでの自分の人生で決して知り得ることのなかった、反対側の人々とその文化について探求することとなったのです。話したいことはたくさんありますが、あえて次のストーリーを伝えたいと思います。と言うのも、その雰囲気まさに調和と真の愛そのものだったからです。話は 3 年前にさかのぼります。

1999 年のクリスマスイブのことでした。（パレスチナ自治区の）キリストの降誕地ベツレヘムにある生誕教会でのことです。



輝かしい光景でした。素晴らしい音が響き渡っていました。時はまもなく新千年紀を刻もうとしていました。平和への願いが、人々の心の中を流れています。私が自分の目で見えた光景を表現するには、十分な言葉が見つかりません。ありとあらゆる文化や民族、宗教を背景とする何百、何千もの人々が、ある人はその信仰のために、またある人は見学のために、全世界からこの生誕教会に集まってきていました。私もこの群集に混じって立っていました。ユダヤ人の若者である自分が、この教会前広場の一角に立つなどとは夢にも思いませんでした。永遠に約束された平和という夢を生きようと決心し、自分達にはその夢を実現させる意志とパワーがあると確信した勇敢な若者たちの一員として、そこに立っていたのです。

私のシーズ・オブ・ピースの仲間の中には、ユダヤ教徒やキリスト教徒、イスラム教徒がいました。私達はお互いに手を取り腕を組み合って、心と心で結ばれながらそこに立ち続けました。

私は旧約聖書の中で、預言者イザヤが数千年も前に語っていた言葉を思い出しました。突如として、その言葉が現実のものとなったのです。パレスチナ人とイスラエル人は一緒に暮らすことができるのだと。パレスチナ人とイスラエル人はお互いに愛し合うことができるのだと。

調和について考える時、あの言葉を思い出し、あのクリスマスの夜に、自分がパレスチナ人の友人達と一緒に過ごしていた時の光景が脳裏に浮かびます。これこそ、調和の姿そのものです。

お互いに共存し平和に暮らすことができる。私達はお互いから学び合い、教え合い、理解し合いました。私達はそれまで知らなかったことに気付きました。私たちは調和して暮らせることを、私は自分の体験から確信しています。お互いを深く理解し合い、そして何よりもお互いに尊重し合うことによって、すべての個人や国々が自由に個性を発揮しながらも、お互い同士、またあらゆる生き物や自然とも調和し合える平和な世界を実現することが可能であることに気付いたのです。

私はこの地域に住むもっともっと多くの人々を集め、私自身の経験や体験談を通して、両者の間の対話が実現するよう働き掛ける努力をし続けていくつもりです。

私は過去 4 年間このようなことに取り組んできました。私はどんな困難があろうとも、また自分達の目的を達成するために戦うことを辞さない人達から、どんな批判を浴びようとも、この活動を止めるつもりはありません。私は、自分が生きている間にはたとえ無理だとしても、自分の子ども達が平和で調和した世界で暮らせるようになる日が訪れるよう、この活動を続けるつもりです。

私の子ども達はきっと、敵と呼ばれる人達にもそれぞれ人格があり、これまで怪物だと思っていた相手も、実は自分や他の人と同じ人間なのだという事を必ず知るでしょう。

そして私は、自分の子ども達もまた、彼ら自身のパレスチナ人の友人達と共に生誕教会に集まる世界中の人々の群集に混じって、お互いに手と手を取り合って欲しいと願っています。

調和

(原文は英語)

マリアム・タゼーム (11 歳)

パキスタン・イスラマバード市

OPF 女子学校 6 年生

あなたが自分の人生にとって物質がいかに大切なものであると考えていようと（実際、物質は人生をさらに快適なものにしてくれますが）、内なる平和と調和こそがカギとなります。

あなたが自分自身の感情をコントロールすることが出来れば、他の誰もあなたをコントロールすることは出来ません。あなた自身が平和であれば、すべての良いことがあなたの前に現れてきます。夢を抱いて下さい。世の中に不可能なことなど無いのですから。他の誰にもあなた自身の人生の目標を思いとどまらせたりはしないで下さい。ネガティブなものを拒絶し、ポジティブなものを吸収して下さい。いつも自分らしく在り続け、素晴らしい時間を過ごして下さい。あなた自身がそうなりたいと願う自分の姿をイメージすれば、必ずやそうなります。

平和は神が働いている私達自身の中から始まります。平和はあなたが自分自身の心の中で戦争状態にある時は決して見つけることは出来ません。

愛には様々な形や大きさがあります。特にあなたの目の前に愛が現れた時は、それをつかみ、強くしっかりと抱き、その愛によってあなたの心と魂をいつまでも温め続けさせて下さい。私達にとって、一人の友に巡り合えた実感するその一瞬は何と素晴らしい瞬間なののでしょうか。

人生における友情というものは、あなた方がどんなに頻繁に会話を交わそうとも、長い間会わないでいようとも、いつまでも続き得るものです。あなたは、時として、自分の思いが友人の心に通じ、同時に友人のあなたを思う気持ちが自分の心にも届いていることに気付くことでしょう。前に向かって進む方法はいくらでもあります、その場でじっと立っている方法は一つしかありません。

あなた自身の中の平和が真っ先にこなくてはなりません。その平和はいろいろな道をたどってやってきます。静かにあなたを包み込むこともあれば、突然降りかかることもあるでしょう。そうやって、そのたどった道を示すのです。私達の背後または前方に横たわっていることは、私達の内側に横たわっていることと比べれば取るに足らないことなのです。

今日、人間の意識構造全体に何かが起こっています。新しい生命が生れつつあります。愛の力に後押しされて、世界中に散らばった小片同士が一つに合わさろうとお互いに探り合っています。

もちろん人は戦争など望んでいません。農場でのんびりとしている貧しい人がたとえ農場に帰って

こられてもその時は一小片の状態であることが分かっているながら、どうして自分の身の危険を犯してまで戦争に行くのでしょうか？ロシアであれ、イギリスであれ、ドイツであれ、普通の人が戦争を望まないのは自然のことなのです。そのことは分かりました。でも、結局のところ、政策を決定するのはその国のリーダー達であるし、民主主義であれ、ファシスト的独裁主義であれ、国会であれ、共産党の独裁主義であれ、彼らにとっては国民を操ることなど簡単なことなのです。いとも容易いことなのです。国民は国民で、他国から攻撃されればそれをリーダー達に訴え、調停者達を彼らの愛国心が足りから国家が危険にさらされるのだと批判していさえいいのです。

私は人々を心から信用しています。すべての人々が愚かであるとはとても思えません。今や地球全体が変化しなければならないということに気付くべき時です。これは本当に重要で決定的なことだと思います。

一人の人間は宇宙と呼ばれる全体の一部であり、時間と空間の中で限定されています。自分の経験は自分だけのものであるし、自分の思いも感情も残りのすべてからは切り離されたものなのです。これは意識上の目の錯覚のようなものです。この錯覚に私達は囚われ、自らを個人的な願望や身近にいるたった何人かの人々に対する愛情のみに束縛してしまっているのです。私達の役割は本来、ありとあらゆる生き物や自然のすべてをあるがままの美しさで受け入れられる思いやりの輪を広げることによって、自らをこの囚われから解放することであるべきなのです。

もはや痛みから逃れる必要など無く、逆にその痛みを共通の生命探しのために注ぎ込むことが出来た時、私達はきっとこの痛みを絶望の表現から希望のきざしへと転換させることが出来るはずです。

この世界においては、どんなにお互いの思考システムが異なっていようと、人々が平和に暮らすことは可能であると思います。私達をお互いに分離させてしまっている限定的な考え方ややり過ごしさえすれば、自分達すべてを包み込む安全な場所に必ずや到達することが出来るのではないのでしょうか？

私は、すべての物事には、その呼び方には関係なく、また科学的、宗教的、無神論的、不可知論的であろうとなかろうと、一つの本源があるように思います。すべての人々がその気になれば、私達はお互いを隔てる境界線を越えた世界に人種の違いを超えた一つの人類家族として楽しく暮らすことが出来るはずです。

私達には、すべての人々が参加し、お互いに尊重しあいながら生きる道を見出すことが可能です。世界は私にとっての家族です。そして何よりも、私達は誰もがみな友達となり得るのです。

心の中の感情を抜きにしては、人生は無意味なものになってしまいます。だからと言って、感情はただ持っていれば十分という訳ではなく、他の人々と分かち合わなければ意味が無いのです。

調和とは何でしょうか

(原文)

上田 茜 (9 歳)

米国リッチモンド市

スプリングフィールド パーク エレメンタリー スクール

私の通っているバージニア州の小学校にはいろんな国からのお友達がいます。肌の色も違えば、もともとの話す言葉も違っているうえに、年れいも、まちまちだったりします。でも一人一人が仲良く楽しい学校生活をすごしています。先生もやさしく、しかし時にきびしく教えてくださいます。

先生が、いつもみんなに言われることは、すべての人を、リスペクトしなさいということです。これはクラスのお友達に対してだけではなく、バスの運転手さんやカフェテリアの先生など、ふだん私たちがお世話になっている多くの人たちも、ふくんでいます。

みんなが仲良くくらすためには、自分だけの事を考えていてはむりで、まわりのいろいろな人たちのことをリスペクトしなくてはならないと思います。これは一人だけで、かいけつできることではなくて、一人一人みんながその気持ちをもたなければ、きづくことの出来ない問題だと思います。

私は、いじめがきらいです。なぜならば、いじめをする人は、はっきりと自分の意見を言わない人で、いつも強い方の味方に付くような、ひきょうものだからです。これはアンフェアだといいます。自分の意見をきちんと主張し相手の事も考えていくように一人一人が気をつけたらいじめは必ずいぶんへるだろうと思います。

アメリカの学校にきて、お友達や先生がほんのちょっとしたことでもすごくほめてくれることに気付きました。けれど、お友達のことを悪く言うと、先生はすごく怒ります。たとえ、おにごっこをしていても、鬼になったお友達をあまりはやし立てると、先生はそれをみていて、いじめた子供をすごく厳しくしかっていたことがありました。日本ではあまりこんな事はなかったのでびっくりしました。

リスペクトとは簡単に言うと心からほめてあげる気持ちだと思います。ほめられると、うれしいし、もっとよくなって、人の役に立とうという気持ちもわいてきます。

もしも、今のアメリカのクラスが日本にあったら私は少し、ぞっとします。見た目がちがったり、年もちがったりすれば理由もなくいじめの子供がいるでしょう。調和とは日本の学校のようにみんな同じ人種でいたり、同じ服そうやぼうしを身につけることではないと思います。一人一人の相手に対する親切な気持ちで作られる、ふんい気が調和のもとだと思います。おたがいをリスペクトする気持ちが、私たちの生活の調和をつくるもとだと思います。

私も毎日の生活の上で、すべての人をリスペクトする気持ちを忘れないように気をつけようとおもいます。

地上のハーモニー：真の最高傑作

(原文は英語)

アリソン・ズビックス (18 歳)

アメリカ合衆国ミシガン州

デューク大学 2 年生

調和は、手に入れるのは難しいけれども、ただの抽象的な夢物語の理想という訳ではありません。それは単なる戦争の休止状態や「平和的共存」、ある美しい春の日の静寂以上のものです。音楽の場合がそうであるように、調和 (=ハーモニー) はそれぞれ特徴のある様々なパートが寄せ集められて輝かしい傑作として創作されるところに存在します。そして人間同士の調和は多種多様な人間が集まって輝かしい傑作、即ち「一つの人類」意識が生れる時に存在します。

人と人、国と国同士の調和を生み出すためには、私達はあらゆる人々の宗教上、政治上信条の違いを認めなければなりません。調和にとって必要なのは、理解すること、赦すこと、生命を尊重すること、そして信頼することに他なりません。誰もがこれらを達成出来たならば、世界は調和と平和を達成することが出来るのです。

すべての国々や人々は、それぞれの歴史のある時点において、他国や他人を不当に扱ったり、逆に不当に扱われたりした経験を持っています。他国に対して抗議の数を「数え続ける」国は常に他国の犯した過ちを列挙こそすれども、便利なことに自国の犯した過ちに対しては盲目です。その行為がどんなに道徳的に疑わしく不正なものであったとしても、自国や自分自身が実は不当な加害者であるのだということに気付くことはありません。ヒトラーでさえもユダヤ人達は自分達の運命を決める権利があるということを理解することが出来ました。偏見の結果、私達は自らの苦しみは他国や他人の苦しみとは比較できないものであり、自分達の考える「正義」も平和のためには時に妥協する必要があるということに気が付かねばなりません。戦いが終わるまでは、分離されたことに対する癒しは始まることはありません。

現在も起こっている中東の悲劇的な紛争では、イスラエル側とパレスチナ側とがお互いに傷つけ合っています。両者とも譲らない故に、どちらの集団がより罪が少なく純粹であるかというのは大事なことはありません。指導者が変わったところで人々は自分達の過去の苦しみを忘れることが出来ないのです。彼らがお互いに過去を清算して始めからやり直すことを学ぶこと無くして、どうして私達は平和の到来を期待することが出来るのでしょうか？彼らは、お互いに異なった民族的背景を擁するにも関わらずすべての生命を尊重してその価値を認めたり、多様性を許容して尊重したりすることすら無くして、またそれぞれの持つ約束の基準を信用すること無くして、決して調和を手に入れること

は出来ません。確かに指導者達にはそれぞれの民族を正しい方向に導く責任がありますが、私も含めてすべての世界市民は助けを必要としている人々に手を差し伸べ、彼らの和解を希求し、自分達を迫害する人々のことをも理解しようとする義務を有しています。私には、他人の行為の動機に判断を下すことなど出来るのでしょうか？私には、自らが傷つき間違った方向に導かれている人を憎むことなど出来るのでしょうか？いつどこどんな世代であれ、それぞれ自らの責任を果たしてきたとは言え、調和に向けての努力は決して終わりを告げることがありません。私達は、どんなに無益に思えてもこの努力を続けなければならないのです。

どうすれば私達は世界の平和と調和へのこの願いを人々の内に呼び覚ますことが出来るのでしょうか？どうすれば私達は人々が痛みや苦しみを感じているにも関わらずお互いに赦させることが出来るのでしょうか？本物で完璧な調和とは一回の決定的な行為で生み出されるものではなく、むしろその都度個人個人が生み出すものである、と私は信じています。私達は、教育を通じて多くの社会的偏見を弱めたり消し去ったりすることが出来ます。人々が紛争を別の視点から見るように働き掛けたり、違いを悪と見ないように手助けをしたりすることで、もっと平和な地球のために貢献することが出来るのです。音楽の世界では、最高傑作は何百ものテーマが壮大なスケール上で織り交ぜられて生み出されます。しかし、その名の示す通り、作曲家は最高傑作づくりにその一生を捧げます。私達が平和な世界を創造するためには、調和が勝手に生れてくることを期待するのではなく、この最高傑作づくりに自ら身を捧げなければなりません。私達は調和した未来の作り手でなくてはならないのです。

そうです、世界にはひどい破壊を引き起こして、他人に甚大な痛みをもたらしてきた人達があります。しかし、私達は復讐を行動の誘因にしてはならないのです。私達は隣人達に、過去を清算して「白紙の状態」から再スタートを切るよう説得しなければなりません。このような言い方をすると世間は子どもっぽいとか楽観的な見方だとか評価するかも知れませんが、果たして他の選択肢はあるのでしょうか？調和した世界を戦車や戦闘機を使って勝ち取ることなど出来はしないし、そのように考えること自体明らかに愚かなことです。しかし、今日、世界の指導者達の多くは、暴力は暴力によって食い止めることが出来ると真剣に信じ、外交の努力を切り捨ててしまっています。私が知りたいのは、もし自分達の敵のことを理解しようと時間を取ることが出来ないのであれば、平和で調和した世界を作り出す望みなどどこにあると言うのでしょうか？

「その日の最大の挑戦は、いかにして心の中に革命を起こすかということである」－ドロシー・デイ

21 世紀の調和世代

(原文は英語)

ダリオ・ダンドレーア (18 歳)

イタリア共和国トリノ県

A・モンティ高等学校 5 年生

僕自身の生の手で愛に触れられる場所があります。そこは、僕が必要とするすべてのものが与えられ、どんな種類の危険からも身を守られていることを実感出来る場所です。その場所とは僕が家族と一緒に暮らす我が家です。僕達は、世界で最も発展した 8 つの国の一つとしてランクされる国に住み、シンプルでいながら快適な生活を送る親密な 4 名のグループです。僕達は毎日 3 食を食べ、モノに満たされた家に住み、2 台の車や良質な家具類を持ち、毎年 1 ヶ月間のバカンスに出掛ける余裕があります。僕は静寂に囲まれて暮らしています。それを見て、友人達は僕の家族は調和の中に暮らしていると言います。

僕には今よりもっと良い生活を想像することが本当に出来ません。と言うのも、自分の功績でもないのに多く恩恵を享受してきたからです。僕は他の仲間達と同じく 10 代の一若者です。良い服に身を包み、6 歳からずっと毎日学校に通ってきました。僕は将来、自分の人生の中で両親が手に入れてきたものと同じもの、あるいは同じでないにしても、それ以上のものを手に入れられるように何かをしたいと願っています。僕は、自分は試験に合格しないのではないだろうか、人が自分のことを好きになってくれるのだろうか、自分は何か役に立ち利益のあることでうまく成功するのだろうか、などと時々心配になることがあります。でも、僕の人生の中には、こんな無意味な泣き言を超える瞬間があります。

僕には、吸い込むだけの空気が十分に無いのではないかと思える程、胸がひどく痛む瞬間があります。「どれ程の人達が僕のように幸せな人生を送っていないのだろうか?」「どれ程の母親達が骨と皮ばかりの我が子に十分な食事を与えられずにいるのだろうか?」「どれ程の子ども達が炭鉱で働かされているのだろうか?」「どれ程の家族達が我が家と呼べる場所を持っていないのだろうか?」などと考えている時、僕の日常生活の中の調和に映っているものは消えて無くなってしまいます。

現に、世界中で飢餓や犯罪、病気やホームレスの問題が起こっています。僕自身は直接そうした極端な状況にさらされたことはないものの、それらが存在していることを知っています。自分がそんな状況の中に身を置いていないこと、むしろ逆にモノで満たされた世界に住んでいる幸運な人間の一人であることに感謝ながらも、ある意味ではみじめな気持ちにもなります。これは、世界の苦しんでいる全ての人々を助けない限り本当の幸せはあり得ないということをまさに証明しています。自分より

幸せな境遇にない他の人々のために身を捧げることをせずに、僕の小さな存在は決して幸せをつかむことが出来ないのです。

いのちの本当の意味を知っていたアルバート・シュヴァイツァー博士という人物は、第三世界の人々を助けることを通じて調和に到達しました。

エコノミスト達は21世紀をグローバル化の世紀と特徴付けています。またある人達はインターネットこそ今世紀のシンボルであると考えています。なぜ僕達は今世紀を調和の時代を築くために人々が力を合わせた世紀として歴史に刻むことが出来ないのでしょうか？15世紀、ほとんどの人々にとって世界が一つの球体であることをイメージすることは不可能でした。18世紀、ほとんどの人々にとって人類が空を飛ぶ日が来ることを信じることなど到底出来ませんでした。しかし、今日では可能と不可能の間に垣根はありません。今日不可能と考えられているものが、明日には可能となるのです。なぜならば、そこに人類の夢は現実のものにすることが出来ると信じている人々が存在しているからです。

この地球上に、すべての国々の人々が過去の過ちを赦し、誤りから学び、そして生き生きと協力し合わなければならない場所があります。その場所とは国連です。国連は世界を変えることの出来る組織である、と僕は信じています。ここで調和が創造され、全世界に広められるのです。こういった理由から、僕の一番の夢は近い将来この組織で働くことです。僕は平和や平等、正義の必要性を人々に伝えながら世界を変えてゆきたいと心から願っています。

目標を達成するのは容易なことではありませんし、そのためには勉強に真剣に打ち込まなければなりません。僕自身の日常生活の中で調和をもたらしている行為は、きっと世界にも届くはずですが、自分のものとは違う他人の信念を尊重したり、助けを必要としている人々に手を差し伸べたりする度に、また初めて出会った人に笑顔で接する度に、僕はいつもそこに驚くべき調和の本質を見るような気がしています。

人々の心の中に愛や尊重、友情などの感情を呼び覚ますミッションに、ぜひみんなにも僕と一緒に参加して欲しいと思います。人生は誰かがある時代に達成する成功や富を単純に合計したものではありません。人生はあまりにも短く、僕達の誰もが富を持ってあの世に行くことは出来ないのです。僕達が築くものすべては、より良い世界を創造し、将来の世代に残すためにあります。なぜならば、世代から世代へと時代の変遷を経て、僕達の調和への夢は本当にパワフルで素晴らしい現実となって表れるのですから！